

同格のガ・対象を指し示すが・特指のガ

田中みどり

- 一 同格のガ・対象を指し示す「ガ」「ノ」・特指のガ
 - 一・一 同格のガ
 - 一・二 対象を指し示す「ガ」「ノ」
 - 一・三 特指のガ
- 二 上代
 - 二・一 上代のガ
 - 二・二 同格のガ
 - 二・三 願望の対象を指し示すが
 - 二・四 「見ゆ」「思ほゆ」の対象を指し示すが・ノ
 - 二・五 特指のガ
- 三 平安期から江戸期のガ
- 四 現代のガ

上代のガには、古事記の「わが二人」に同格のガが認められる。
記紀萬葉の「見が欲し」は「見ることが欲しい」、萬葉集の「妹が見まく欲し」は「妹を見たい」で、ガは願望の対象を指し示す。自発の「君が見ゆ」「妹が思ほゆ」のガは、「見える」「思われる」の対象を指し示す。不可能の「妹が見えぬ」のガも「見えぬ」の対象を指し示す。これらを「対象を指し示すが」と名付ける。これは、現代語の「絵が見たい」「山が見える」「山が見えない」などと同じである。
天草版イソホ物語には「用心が要る」の用例があり、このガは必要の対象を指し示し、これも現代語に続くものである。
また、萬葉集の「吾が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 晝露に 吾が立ち濡れし(吾立所露之)」の「晝露に吾が立ち濡れし」は、連体形止めで詠嘆をあらわすと考えるのが一般である。しかし、これは、ひそかに別れを告げに来た弟を思い、いつまでもその場に立ち尽くす姉の慟哭のこめられた、強いことばで、この場合の「ガ」は係助詞であると考ええる。特別に強く指示するということで、これを「特指のガ」と名付ける。現代語の「私が山田です。」に続くものである。

本稿では、小学館新編日本古典文学全集『古事記』（一九九七年）、小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』（一九九四年～一九九八年）、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』（一九九九年～二〇〇三年）、岩波新日本古典文学大系『伊勢物語』（一九九七年）、おうふう『ESOPONO FABLES』（一九九九年）、小学館日本古典文学全集『洒落本 滑稽本 人情本』（二〇〇〇年）、小学館日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』（一九九五年）を底本とする。ただし、萬葉集の訓については、適宜、勘案する。以下、新日本古典文学大系を「新大系」、小学館新編日本古典文学全集を「全集」、新潮日本古典集成を「集成」と略す。

○印は歌・物語の本文、◎印は訳、◇は引用、※は筆者の考えをあらわす。

一 同格のガ・対象を指し示す「ガ」「ノ」・特指のガ

一・一 同格のガ

格助詞「ノ」の連体格用法のひとつに〈同格〉がある。一方、上代には「ノ」と近いはたらきをした「ガ」には、〈同格〉の用法は認められていない。

ところで、古事記19歌謡

○葦原の 穢しき小屋に 菅葎 弥清敷きて 我が二人寝し
(和賀布多理泥斯)

〔古事記19歌謡〕

の全集の訳は

◎葦原の中のきたない小屋に、菅の筵をいよいよすがすがしく敷いて、私たち二人は寝たことよ

〔全集『古事記』一六〇頁～一六一頁〕

と、「わ」と「二人」を同格に訳している。古事記中巻に

○於西方、除吾二人、無建強人。然、於大倭国、益吾二人而、建男者、坐祚理。

〔全集『古事記』二二〇頁〕

もあり、漢文では「吾二人」の語順である。そして、全集ではこれを「われふたり」と訓み、「私たち二人」と訳している。訳は、19歌謡の「わが二人」の訳と同じ「私たち二人」である。

◎西の方には、私たち二人をおいて他には、猛々しく強い者はありません。ところが、大和国には、私たち二人にもまして、強い男子がいらつしやったのです。

「わが二人」は、漢文の表現とあいまって、同格の「私たち二人」の用法をもつようになる。そのとき、「吾が二人」の「が」は同格をあらわす。このように、古事記には〈同格のガ〉がある。

一・二 対象を指し示す「ガ」「ノ」

形容詞は、客観的にももの属性をあらわすと同時に、主観的に「私が思う」内容をあらわす。たとえば、「別れが

悲しい」は、

別れというものは悲しいものである

という客観的認識をあらわしもするが、

私は別れが悲しい

という主観的な情意をあらわすことの多い表現である。ま

た、「バラは美しい」は、

バラの花が美しい

という一般に同意され得るバラの客観的な属性をあらわし
もし、

私はバラが美しいと思う

という主観的な嗜好をあらわしもする。一方に、「バラな
んて美しいとは思わない。」という感想もあり得るのであ
る。形容詞は、その時々々に濃淡をもつて、主観と客観との
間で表現される。とりわけ情意をあらわす形容詞の場合に
それは顕著であるが、状態をあらわす形容詞である「高
い」のような場合にも同じで、「山が高い」は一般に山と
いうものの属性を示すが、その「高い低い」は相対的なも
のである。「私の判断」がそこには在る。

筆者は拙稿『形容詞語幹十サ』の詠嘆の意味——人の
ともしさ・妹がかなしさ・見るがともしさ』（『京都語文』
第26号 二〇一八年）において、

◇「形容詞語幹十サ」は特別な語法ではなく、「名詞」であり、

「ノ・ガ十名詞（形容詞語幹十サ）」の詠嘆は、「ノは
くであることよ」と訳すのではなく、「ノの…さよ」と訳す
ものである。それは、自身の感情を吐露するものでもあると
同時に、「ノ」「ガ」がうける名詞・名詞句「ノ」の属性でも
ある。自身の感情を吐露する場合「ノ」「ガ」の上は対象と
なり、属性の場合「ノ」「ガ」の上は主語となる。それは、
自身の感情を吐露するものでもあるため、ク語法で詠嘆をあ
らわすものが「ノであることよ」と訳すことができ、冷静で
あるのに対し、情感的ということができる。

を明らかにした。それは、従来、主格の格助詞とされてき
たこの場合の「ノ」「ガ」が、「人」「妹」「ノを見る」の属
性をあらわすものであると同時に、それを歌の主が「とも
し」「かなし」と思う対象を指し示すものであるというこ
とである。

さらに一般の形容詞文においても、

○ひなくもり 碓氷の坂を 越えしだに 妹が恋しく 忘れえ
ぬかも（伊毛賀古比之久 和須良延奴加母）

〔萬葉二十・4407 他田部子誓前〕

は、「恋し」は情意をあらわす形容詞で、恋しい対象の
「妹」を「ガ」で示している。「恋し」のような情意の形
容詞の対象は、従来は「主格」と処理されてきたのである

が、ここに、〈情意の対象〉と名付ける。「母が恋しい。」のような現代語の場合も同じである。また、「山が高い」のように、状態をあらわす「高い」のような形容詞の場合、「ガ」は主格である側面が強いが、「私は、この山が高いと思う。」のような文の中では、「山が」は「山を」と置き換えることもできる体のものであつて、「ガ」は「思う」の対象をあらわすこととなる。よつて、「山が」を「思考の対象」と名付ける。そして、「ガ」を〈対象を指し示すガ〉と名付ける。

次に、

○今のごと 恋しく君が 思ほえば (古非之久伎美我 於毛保 要婆) いかにかもせむ するすべのなき

〔萬葉十七・3928〕

の場合は、「恋しく思ほゆ」と、形容詞と自発の動詞が一体になったものであるが、この場合にも、恋しく思われる対象の「君」を「ガ」で示している。この「君が」も〈情意の対象〉であり、現代語の「故郷が恋しく思われる。」の場合も同じである。

さらには、「妹が思ほゆ」「故郷が思われる」のような自発の場合も、「妹が」「故郷が」は〈自発の対象〉であり、この「ガ」を〈自発の対象を指し示すガ〉と名付ける。

今、萬葉集の例をあげた。記紀萬葉に「見が欲し」とい

うことばがあり、これは記紀萬葉の時代にすでに一語化して賞賛のことばとなつていてと考えられるが、もとは「見ることが欲しい」の意であろう。この場合の「ガ」は「欲し」の対象である。願望の「君が見まく欲し」、自発の「山が見ゆ」、不可能の「山が見えぬ」などの「ガ」も、同様に〈対象を指し示すガ〉である。

一・三 特指のガ

また、萬葉集の

○吾が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 吾が立ち

濡れし (吾立所霑之)

〔萬葉二・105 大伯皇女〕

の「暁露に吾が立ち濡れし」は、連体形止めで詠嘆をあらわすと考えるのが一般である。しかし、これは、ひそかに別れを告げに来た弟を思い、いつまでもその場に立ち尽くす姉の慟哭のこめられた、強いことばで、この場合の「ガ」は係助詞であると考ええる。特別に強く指示するということ、これを〈特指のガ〉と名付ける。

以上のように、古典語のガの説明の中に、従来抜け落ちていた観点がある。そこで、まず古典語のガを整理し、詳しく述べる。

二 上代

二・一 上代のガ

上代のガの用法には、

1. 名詞に続く 所有・所属をあらわす―「大刀が緒」(記2歌謡)
2. 形式名詞に続く 「ごと」「から」「ため」「むた」「まにま」など―「見けむがごとも」(萬九・1807)
3. 副詞に続く 「上に」「中に」「下に」など―「栲衾 柔やが下に」(記5歌謡)
4. 助動詞「ごとし」に続く―「あがごとく」(萬十・3750)
5. 主述関係をもつ句が名詞にかかる―「吾が見し子ら」(記42)
6. 条件句の主述関係をあらわす場合―「…青山に日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ…」(記2歌謡)
7. 形容詞の名詞形(形容詞+さ)に続き、詠嘆をあらわす―「妹がかなしき」(萬二十・4391)
8. 「欲し」の内容をあらわす―「見が欲し」(萬十・4112)「ありが欲し」(萬六・1059)

などが認められている。

これらのほかに、連体格のものでは、

9. 同格をあらわすもの

が認められる。さらに、

- ⑦ 7の「妹がかなしき」のような例は、へーに述べたように、「かなし」が妹の属性をあらわすと同時に、歌の主の情意をあらわすものであるため、ガは主格であると同時に、形容詞の対象を指し示すものとするができる

- ⑧ 8については、「見が欲し」は「見ることが欲しい」の意であつて、これは「見る」の対象を指し示す

と考える。さらに、

10. 「妹が見まく欲し」の場合、「妹が」は「見まく欲し」の対象であつて、ガは「見まく欲し」の対象を指し示す

と考える。また、

11. 「山が見ゆ」「君が思ほゆ」(自発)、「山が見えぬ」(不可能)などのガは、自発・可能の対象を指し示す

と考える。

二・二 同格の方

萬葉集卷二・210および213に、一字一音表記ではないが、「吾が二人見し」と「二人吾が寝し」とで変化をつけた例がある。

○うつせみと 思ひし時に 取り持ちて 吾が二人見し (吾二人見之) 走り出の 堤に立てる 槻の木之：我妹子と 二人吾が寝し (二人吾宿之) 枕づく つま屋のうちに：

○…吾が二人見し (吾二人見之) …二人吾が寝し (二人吾宿之) …
〔二・213 柿本人麻呂〕

210歌の訳は、

新大系 ◎…手を取り合って二人で眺めた…愛する妻と二人で寝た…

全集 ◎…手に取り持って 二人で眺めた…亡き妻と 二人で寝た…

のように、「二人」をいずれも「二人で」と副詞に訳している。

また、これも一字一音表記ではないが、動作主体が単数の「吾一將宿」

○泊瀬風 かく吹く夕は 何時までか (及何時) 衣片敷き 吾がひとり寝む (吾一將宿)

〔萬十・2261 秋の相聞 寄風〕
も「吾がひとり寝む」と訓まれている。古事記19歌謡

○葦原の 穢しき小屋に 菅暈 弥清敷きて 我が二人寝し (和賀布多理泥斯) 〔古事記19歌謡〕

の「和賀布多理泥斯」をもとに、210歌の「吾二人見之」を「わがふたりみし」と訓むことができ、「二人吾宿之」を「ふたりわがねし」と訓むことができるとするならば、2261歌の「吾一將宿」を「わがひとりねむ」と訓むことは可能であろう。萬葉十三・3237に

○…沖つ波 来寄る浜辺を くれくれと ひとりそ我が来る (獨曾我来) 妹が目を欲り 〔萬葉十三・3237 雑歌〕

「ひとりそ我が来る」の例があり、「ひとり」を「一人で」と訳すことができるので、2261歌の場合には、「一体いつまで…わたくしは一人で寝るのであろうか」という訳になる。これに類する例は萬葉集に、動作の主体が一人称単数であるもの

○山川に 釜を伏せて 守りもあへず 年の八歳を 吾がぬすまひし (吾窃儻師) 〔萬葉十一・2832 譬喩〕

○かくのみに ありける君を 衣ならば 下にも着むと 吾が思へりける (吾念有家留)

○かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて 吾が

思へりける（吾念有来） 「萬葉十六・3804 有由縁」

新大系注 ◇結句、係り結びではないが、主格助詞「が」があるので連体形で止める。

二人称単数であるもの

○恋しけく 日長きものを 逢ふべかる 夕だに君が 来まさ
ざるらむ（夕谷君之 不来益有良牟）

「萬葉十・2039 秋の雜歌」

一人称複数であるもの

○大船の 津守が占に 告らむとは まさしく知りて 我が二
人寝し（我二人宿之） 「萬葉二・109 大津皇子」

がある。さらに、これらと類似の歌と考えてよいものに、

○かくのみに ありけるものを 妹も吾も 千歳のごとく 頼
みたりける（憑有来） 「萬葉三・470 大伴家持」

がある。これを新大系も全集も「頼みたりけり」と訓んで
いるのであるが、新大系注に、

新大系注 ◇結句は、上に係りの助詞が無いので、文法上は

「けり」で止める方が正しいが、諸本のうち「けり」は紀州本のみ。敢えて「ける」と訓む注釈書もある。「今、この処は感慨を寓する所なれば「ケル」とよみたる方よかるべし。この故に旧訓に随ふ」（『講義』）

とある。『萬葉集講義』に「感慨を寓する所」と言っているが、係助詞「モ」は格助詞を含むことがあり、「妹も吾

も」の「モ」の中には「ガ」を含んでいるため、これも

○かくのみに ありけるものを 妹も吾も 千歳のごとく 頼
みたりける

として参考に加える。この場合は、動作主体が「妹も吾も」であるから、複数形である。

新大系『萬葉集』、全集『萬葉集』は、これらを、「わが」を主格とし、「二人」「ひとり」を副詞で訳している（「わたくしたちは二人で」「わたくしは一人で」）。

○大船の 津守が占に 告らむとは まさしく知りて 我が二
人寝し（我二人宿之） 「萬葉二・109 大津皇子」

○新大系訳 （大船の）津守めの占いに現れるだろうとは、先
刻承知の上で、私たちは二人寝たのだ。

○全集訳 （大船の）津守ふぜいの占いに 出るだろうとは
百も承知で われわれは二人で寝たのさ

ところが、古事記19歌謡

○葦原の 穢しき小屋に 菅暈 弥清敷きて 我が二人寝し
（和賀布多理泥斯） 「古事記19歌謡」

の全集の訳は

○葦原の中のきたない小屋に、菅の筵をいよいよすがすがしく敷いて、私たち二人は寝たことよ

「全集『古事記』一六〇頁〜一六一頁」

と、「わ」と「二人」を同格に訳している。古事記中巻に

○於西方、除吾二人、無建強人。然、於大倭国、益吾二人而、建男者、坐禪理。
〔全集『古事記』二二〇頁〕

もあり、漢文では「吾二人」の語順である。そして、全集ではこれを「われふたり」と訓み、「私たち二人」と訳している（岩波日本古典文学大系『古事記 祝詞』1958年は「われ二人」、日本古典全書『古事記』1962年は「あれら二人」）。訳は、19歌謡の「わが二人」の訳と同じ「私たち二人」である。

◎西の方には、私たち二人をおいて他には、猛々しく強い者はありません。ところが、大和国には、私たち二人にもまして、強い男子がいらっしゃったのです。

古事記19歌謡の訳と萬葉集の訳の違いは、どこから生まれたものであろうか。

これは、萬葉集卷十五・3627、萬葉集卷十・1941
○…大舟を 漕ぎわが行けば（許藝和我由氣婆） 沖つ波 高く立ち来ぬ…

〔萬十五・3627 属物發思歌一首并短歌〕
○朝霧の 八重山越えて 呼子鳥 鳴きや汝が来る（吟八丈来） やどもあらなくに

〔萬十・1941 夏の雜歌 詠鳥〕
のように「わが」「汝が」が述語動詞「行く」「来る」の直前に置かれているものと、萬葉集卷十七・3993

○…率ひて わが漕ぎ行けば（和賀己藝由氣婆）…

〔萬十七・3993 大伴池主〕

「わが漕ぎ行けば」において、動作主体をあらわす「わが」が、複合動詞「漕ぎ行く」の前に置かれているものがあることに解を求めることができる。3993歌は大伴池主のものであるから、萬葉集の中でも新しい時代のものである。一方、3627歌は作者不詳であるが、古挽歌の次に据えられていて、古い時代のものである可能性もある。後の眼から見ると、「大船を漕ぎわが行けば」は、「わが漕ぎ行けば」にくらべ、ことばになめらかさを欠くように受けとめられる。さらに、1941歌の場合、係助詞ヤもまた、「呼子鳥」の次にはなく、「鳴き」と「汝が来る」との間で置かれている。同様に、

○ほととぎす 今朝の朝明に 鳴きつるは 君聞きけむか 朝眠か寝けむ（朝宿疑將寐）

〔萬十・1949 夏の雜歌 詠鳥〕

では係助詞カが「眠を寝」という連語の間に入っている。「漕ぎわが行けば」のような語順は、これらの係助詞ヤ・カ的位置とも関連するもので、古い日本語では、「わが」「なが」などの人称をあらわす語が、核となる動詞の直前に置かれる語法があったと考えられる。（これは、一種の人称接辞といつてよい。）。

「二人吾が寝し」も同じで、「吾が二人見し」との変化は、「二人吾が寝し」のほうが古い語法によるものである。しかし、動作主体をあらわす人称接辞としての「吾が」が機能しなくなり、「吾が」を頭に置いて、「吾が二人見し」のようにあらわすこととなる。柿本人麻呂や大津皇子の時代には、すでに「吾が二人見し」の語順が一般的であったのであるが、人麻呂が「吾が二人見し」「二人吾が寝し」のヴァリエーションを使用するのは、この時代、まだ、「吾が二人見し」と「二人吾が見し」に意味上の違いはなく、「吾」は動作主体をあらわす語ととらえられていたことによる。2261歌の「吾がひとり」も、「私はひとり」であった。やがて、「吾が二人」は漢文の「吾二人」の表現（※この表現の時期を、一応古事記成立の時期として考える）とあいまって、「私たちふたりは」の意となった。そのとき、「吾が二人」の「が」は同格の助詞となる。

二・三 願望の対象を指し示すが

記紀に、「見が欲し」という表現がある。

- つぎねふや 山代河を 宮上り 我が上れば あをによし
奈良を過ぎ 小楯 倭を過ぎ 我が見が欲し国は(和賀美賀
本斯久迹波) 葛城高宮 我家の辺 「古事記 59歌謡」
○つぎねふ 山背河を 宮浜り 我が浜れば 青丹よし 那羅

を過ぎ 小楯 大和を過ぎ 我が見が欲し国は(和餓瀾餓朋
辞区珂波) 葛城高宮 我家のあたり

〔日本書紀 54歌謡〕

ももとの意味は「見ることが欲しい」で、「欲し」が実質的な意味になっていて、「見」は「欲し」の対象、「が」は「欲し」の対象を指し示す助詞である。つまり、この場合の「見」は連用形出自の名詞となっている。

萬葉集でこれにあたる表現は、

a 「見が欲し」

○：明日香の 古き都は 山高み 川とほしろし 春の日は
山し見がほし 秋の夜は 川しきやけし(河四清之)：

〔萬葉三・324 山部赤人〕

○橘は 花にも実にも 見つれども いや時じくに なほし見
が欲し(奈保之美我保之) 〔萬葉十八・4112〕

○：三諸つく 鹿背山のまに 咲く花の 色めづらしく 百鳥
の 声なつかしき ありが欲し(在貞石) 住みよき里の
荒るらく惜しも 〔萬葉六・1059〕

※1059歌の「在貞石」は一字一音ではないが、「ありが欲し」と訓んでよいものとして、ここに挙げる。

b 「見まくの欲し」

○なでしこが 花取り持ちて うつらうつら 見まくの欲しき
(美麻久能富之伎) 君にもあるかも

〔萬葉二十・4449〕

○春日山 朝立つ雲の 居ぬ日なく 見まくの欲しき (見巻之欲寸) 君にもあるかも

c 「見まく欲し」

〔萬葉四・584 大伴坂上大嬢〕

○昨日見て 今日こそ隔て 我妹子が ここだく継ぎて 見まく欲しきも (吾妹児之 幾許継手見巻欲毛)

〔萬葉十一・2559〕

※ 「見巻欲」については、一字一音の例がないが、右のbにあげた4449歌の「美麻久能富之伎 見まくの欲しき」・584歌の「見巻之欲寸」などの例から、「見巻欲毛」を「見まく欲しき」と訓む。

d 「見欲し」「着欲し」

○見欲しきは (見欲者) 雲居に見ゆる うるはしき 十羽の

松原： 〔萬葉十三・3346〕

○筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど 君が御衣し あやに着欲しも (安夜尔伎保思母)

〔萬葉十四・3350〕

※3346歌の「見欲者」は、3350歌の「伎保思着欲し」を参考に、「見欲しきは」と訓んでよいものと考ええる。

などである。

a の1059歌は、

春の日に三香原の荒墟を悲傷して作りし歌一首 短歌を并

せたり

○三香原 久邇の都は 山高く 川の瀬清み 住み良しと 人は言へども あり良しと 吾は思へど (住吉迹 人者雖云在吉跡 吾者雖念) 古りにし 里にしあれば 国見れど人も通はず 里見れば 家も荒れたり はしけやし かくありけるか 三諸つく 鹿青山のまに 咲く花の 色めづらしく 百鳥の 声なつかしき ありが欲し 住みよき里の (在良石 住吉里乃 荒るらく惜しも 〔萬葉六・1059〕

という歌である。前半の「住み良し」「あり良し」は、「住む」「あり」の連用形で、形容詞「よし」と複合語を形作っている。後半の「住みよき里」の「住みよき」も同じである。歌の前半では「住み良し」と「あり良し」が対をなしているが、後半の「住みよき(里)」は「ありが欲し」と対をなしている。また、六・1047歌

寧楽の故郷を悲しみて作りし歌一首 短歌を并せたり

○やすみしし 吾が大君の 高敷かす 大和の国は：山見れば

山も見が欲し 里見れば 里も住みよし (山見者 山裳見良

石 里見者 里裳住吉)： 〔萬葉六・1047〕

では、「見が欲し」と「住みよし」とが対になっている。

この「見が欲し」について言えることは、「見が欲し」はもと動詞連用形出自の名詞を「ガ」が受けるものであったということである。また、萬葉集に「見が欲し」「ありが欲し」の例があるところから、これは萬葉集の時代にも

使われていたことは明らかであるが、六・1047歌では「山も見が欲し」と「里も住みよし」とが対比されており、三・324歌に、

○…春の日は 山し見がほし(山四見容之) 秋の夜は 川

しさやけし(河四清之) :

[萬葉三・324]

というように、「見が欲し」と「さやけし」とが対比されていることから、この時代すでに「見が欲し」は一語化していた、と考えることができる。「見たい見たいと思うほどに、)すばらしい」ということであろう。

a 「見が欲し」、b 「見まくの欲し」、c 「見まく欲し」

の「欲し」は実質的な形容詞である。

ところが、dの十三・3346歌、十四・3350歌、

○見欲しきは(見欲者) 雲居に見ゆる うるはしき 十羽の

松原 :

[萬葉十三・3346]

○筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど 君が御衣し あやに着欲

しも(安夜尔伎保思母)

[萬葉十四・3350]

の「見欲し」「着欲し」は、「見る」「着る」の連用形が形容詞「欲し」と複合語を形作っていて、「住みよし」「ありよし」と同じ形になっている。1059歌の「住みよし」「ありよし」は「住みよい」「居よい」であり、fの「見欲し」「着欲し」は「見たい」「着たい」であって、複合語の後項は助動詞に近づいている。これがもともと新しい形

であろう。

助詞「ガ」が新しい助詞「ノ」に勢力をゆずっていく過程で、a 「見が欲し」のような表現も衰退していった。

「欲しい」対象の「見」は、いまだ実現していない事柄であるので助動詞「ム」を伴い、また「くであること」の意の「ク」で名詞化して、b 「見まくの欲し」・c 「見まく欲し」を生じた。

c 「見まく欲し」

○昨日見て 今日こそ隔て 我妹子が ここたく継ぎて 見まく欲しきも(吾妹兒之 幾許継手見巻欲毛)

[萬葉十一・2559]

e 「見まく欲る」

○見まく欲り(見麻久保里) 思ひしなへに 縷かげ かぐはし君を 相見つるかも

[萬葉十八・4120]

f 「見まく欲りす」

○雲隠り 行くへをなみと 吾が恋ふる 月をや君が見まく欲りする(月哉君之 欲見為流)

[萬葉六・984]

○梯立の 倉橋川に 立てる白雲 見まく欲り 我がするなへに(見欲 我為苗) 立てる白雲

[萬葉七・1282]

○朝なぎに 来寄る白波 見まく欲り 吾はすれども(欲見 吾雖為) 風こそ寄せね

[萬葉七・1391]

※984歌・1282歌・1391歌は一字一音表記で

はないが、「欲見為流」「見欲為」「見欲為」を「見まく欲りす」と訓んでよいものとして、ここに挙げる。

e 「見まく欲る」、f 「見まく欲りす」の「欲る」「欲りす」は実質的な動詞である。c の「見まく欲し」が感情をあらわすのに比べ、能動的な意思をあらわす。

「見まく欲りする」主体は、名詞句や疑問の句のうち、自分や親愛する人の場合、

○梯立の 倉橋川に 立てる白雲 見まく欲り 我がするなへ
に(見欲 我為苗) 立てる白雲 [萬葉七・1282]

○雲隠り 行くへをなみと 吾が恋ふる 月をや君が 見まく
欲りする(月哉君之 欲見為流) [萬葉六・984]

「我が」「君が」などが指し示される。自分や親愛する人以外の人の場合には、

○…見る人の語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする(聞人
之 視巻欲為) 御食向かふ 味経の宮は 見れど飽かぬか
も [萬葉六・1062]

2 歌 「聞く人の」のように「ノ」で指し示されている。128

○梯立の 倉橋川に 立てる白雲 見まく欲り 我がするなへ
に(見欲 我為苗) 立てる白雲 [萬葉七・1282]

の場合には「見まく欲り我がする」と「我が」が「見まく欲り」と「する」との間に入っている。

次に、「欲し」「欲る」「欲りする」の対象はどのようにあらわされているのか。

○…春の日は 山し見がほし(山四見容之) 秋の夜は 川し
さやけし(河四清之) … [萬葉三・324]

においては、「見がほし」「さやけし」の対象は「山し」「川し」のように、「シ」で指し示されている。

○恋ひ死なむ 後は何せむ 生ける日の ためこそ妹を 見ま
く欲りすれ(為社妹乎 欲見為礼) [萬葉四・560]

※「妹乎 欲見為礼」は、「妹を 見まく欲りすれ」と訓んでよいものと考ええる。

では、「見まく欲りす」の対象を、「妹を」と、「ヲ」で指し示している。ところが、c の「見まく欲し」の場合には、

○昨日見て 今日こそ隔て 我妹子が ここだく継ぎて 見ま
く欲しきも(吾妹兒之 幾許継手 見巻欲毛) [萬葉十一・2559]

「我妹子が」と「ガ」で指し示している。「まく欲し」はこの時代、いまだ「ま・く・欲し」であるが、一語化して「くしたい」の意になろうとしている段階である。2559 歌が一音一字表記ではないことがネックになるが、これは後の

○其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ [今昔物語巻第三]⁽³⁾
に続いていくものである。対象語格用法とも呼ばれるもの

であるが、願望(たい)・能力(できる)・必要(いる)・好悪(すきだ、きらいだ)などの対象を示す。これは、のちの時代の「絵が見たい」などの表現に繋がるものと考えらる。

以上、

「見が欲し」の対象をシで指し示すものがあり、
「見まく欲りす」の対象を「ヲ」で指し示すものがあり、

また、「見まく欲し」の対象を「ガ」で指し示しているものがあつた。

ガで指し示すものは、のちの時代の「絵が見たい」などの表現に繋がる、ということが言える。

二・四 「見ゆ」「思ほゆ」の対象を指し示すガ・ノ

現代では「夢を見る」「夢に見る」と言うが、萬葉集ではおおむね「夢に見ゆ」の形である。が、ごく少数ではあるが「夢に見る」の用例もある。

○：相見ねば いたもすべなみ きたへの 袖返しつつ 寝
夜落ちず 夢には見れど (伊米爾波見礼登) 現にし 直
にあらねば 恋しけく 千重に積もりぬ…

[萬葉十七・3978]

のように。また一例ではあるが、

○：新たな夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見せこそ (夢尔令見社) 劍大刀 斎ひ祭れる 神にしませば

[萬葉十三・3227]

「夢に見す」の用例もある。

「見る」対象を示すには、

○はねかづら 今する妹を 夢に見て (今為妹乎 夢見而) 心の内に 恋ひわたるかも [萬葉四・705 家持]
のように、「ヲ」を用いる。

○常ならぬ 人国山の 秋津野の かきつはたをし 夢に見し かも (垣津幡駕 夢見鴨)

[萬葉七・1345 譬喩歌 寄草]

の場合は、その後に間投助詞「シ」が入っている。

次に「夢に見ゆ」(自発)について考える。

○あしひきの 山き隔りて 遠けども 心し行けば 夢に見え けり (伊米爾美要家里) [萬葉十七・3981]

夢を見る主体を示す表現は、

○国遠み 直には逢はず 夢にだに 吾に見えこそ (夢谷 吾尔所見社) 逢はむ日までに [萬葉十二・3142]

「吾に」のように「二」である。

夢に見える対象は、

○旅に去にし 君しも継ぎて 夢に見ゆ (吉美志毛都芸氏 伊
米尔美由) あが片恋の 繁ければかも

〔萬葉十七・3929〕

「君しも」では、「シ」で示している。

○網児の山 五百重隠せる 佐堤の崎 小網延へし子が 夢に
し見ゆる (左手蠅師子之 夢二四所見)

〔萬葉四・662 市原王〕

「小網延へし子が」は「ガ」で示す。この歌は連体形止めで、詠嘆をあらわす。

○間なく 恋ふれにかあらむ 草まくら 旅なる君が 夢にし
見ゆる (客有公之 夢尔之所見)

〔萬葉四・621 佐伯宿祢東人〕

「旅なる君が」は「ガ」で示す。これも連体形止めである。人そのものではなく、人の姿などは、

○白たへの 袖折り返し 恋ふればか 妹が姿の 夢にし見ゆ
る (妹之容儀乃 夢二四三湯流)

〔萬葉十二・2937 正述心緒〕

のように、「乃 ノ」で示す。対象を指し示す助詞は、「ガ」のみならず、「ノ」でもあり得る。但し、「之」表記の場合、「ガ」と訓むか「シ」と訓むかは難しい問題である。

※ ○かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて
吾が思へりける (吾念有来)

の新たな系注に、

〔萬葉十六・3804 有由縁〕

◇結句、係り結びではないが、主格助詞「が」があるので連体形で止める。

とあるが、本文中に主格助詞の表記はない。

○夜のほども 吾が出でて来れば 吾妹子が 思へりしく
し 面影に見ゆ (吾妹子之 念有四九四 面影二三湯)

〔萬葉四・754 家持〕

○灯火の かげにかがよふ うつせみの 妹が笑まひし
面影に見ゆ (妹蛾咲状思 面影尔所見)

〔萬葉十一・2642 寄物陳思〕

○年も経ず 帰り来なむと 朝影に 待つらむ妹し 面影
に見ゆ (将待妹之 面影所見)

〔萬葉十二・3138 羈旅発思〕

などが「シ」で訓まれているのは、歌末を終止形で訓むことに拠る。

○魂合へば 相寝るものを 小山田の 鹿猪田守ること
母し守らすも (母之守為裳 一云、母が守らしし

母之守之師) 〔萬葉十二・3000 寄物陳思〕

の中で、本文と「一云」とで「之」の訓を「シ」と「ガ」とで訓み分けているように、古くからの訓で、「之」の扱いは終止形で終わるか連体形で終わるかによって決めているが、確証はない。

誰の目に見えるのかは、

○国遠み 直には逢はず 夢にだに 吾に見えこそ (夢谷 吾
尔所見社) 逢はむ日までに

〔萬葉十二・3142 羈旅発思〕

「吾に見えこそ」のように「尔ニ」で示す。

次に「面影に見ゆ」。

○沖つ波 とをむ眉引き 大船の ゆくらゆくらに 面影に
もとな見えつつ (於毛可宜尔 毛得奈民延都々) かく恋ひ
ば…

〔萬葉十九・4220〕

○夜のほぼろ 吾が出でて来れば 吾妹子が 思へりしくし

面影に見ゆ (吾妹子之 念有四九四 面影二三湯)

〔萬葉四・754〕

○灯火の かげにかがよふ うつせみの 妹が笑まひし 面影
に見ゆ (妹蛾咲状思 面影尔所見)

〔萬葉十一・2642〕

4220歌「とをむ眉引き」には、指し示す助詞はない。

754歌「吾妹子が 思へりしくし」、2624歌「妹が
笑まひし」の場合、面影に見えるものは「シ」で指し示さ
れる。

次に、「見ゆ」の否定形「見えぬ」(不可能)も、

○思はずも まことあり得むや さ寝る夜の 夢にも妹が 見
えざらなくに (伊米尔毛伊母我 美延射良奈久尔)

〔萬葉十五・3735〕

○新室の こだきに至れば はだすき 穂に出し君が 見え
ぬこのころ (穗尔弓之伎美我 見延奴已能許呂)

〔萬葉十四・3506 東歌〕

○春日野の 山辺の道を 恐りなく 通ひし君が 見えぬころ
かも (通之君我 不所見許呂香裳)

〔萬葉四・518 石川郎女〕

「見えず」の対象の「妹」「君」を「ガ」で示す。

次に「思ほゆ」。

○海人娘子 いざり焚く火の おほほしく 角の松原 思ほゆ
るかも (都努乃松原 於思保由流可聞)

〔萬葉十七・3899〕

○波谿の 崎の荒磯に 寄する波 いやしくしくに 古思ほゆ
(伊尔之敵於母保由)

〔萬葉十七・3986〕

これらの歌には、自発「思ほゆ」の対象「角の松原」「古」
を指し示す助詞は用いられていない。

○山吹は 日に日に咲きぬ 愛しと あが思ふ君は (安我毛布
伎美波) しくしく思ほゆ

〔萬葉十七・3974〕

「あが思ふ君は」では「ハ」が表示されている。これは、
強調をあらわす語である。

○朝開き 入江漕ぐなる 梶の音の つばらつばらに 吾家し
思ほゆ (吾家之於母保由)

〔萬葉十八・4065〕

「吾家」では「シ」が表示されている。

○移り行く 時見るごとくに 心痛く 昔の人し 思ほゆるかも
(牟可之能比等之 於毛保由流加母)

〔萬葉二十・4483〕

のように、人を指す場合も同じ。このように「思ほゆ」の対象を「シ」であらわすものが多い。

○秋山を ゆめ人かくな 忘れにし そのもみち葉の 思ほゆるかに (其黄葉乃 所思君)

〔萬葉十・2184〕

「そのもみち葉の」の場合には、助詞「の」が使用されている。これは、下の「らく」との関係で名詞句となったため、「ノ」が入ったものである。これは、親愛する人の場合であれば、

○よしゑやし 恋ひじとすれど 木綿間山 越えにし君が 思ほゆるかに (越去之公之 所念良国)

〔萬葉十二・3191 悲別歌〕

「君が」のように、「ガ」が入る。ただし、

○暁の 夢に見えつつ 梶島の 磯越す波の しきてし思ほゆる (石超浪乃 敷豆志所念)

〔萬葉九・1729〕

1729歌の場合の「梶島の磯越す波の」は、後の「しきてし」を引き出す序詞であるので、「波の」の「の」は、「し」のように「を」あらわす助詞である。思う主体を指し示す助詞は

○今作る 斑の衣 面影に 吾に思ほゆ (面影 吾尔所念) しまだ着ねども 〔萬葉七・1296〕

「吾に思ほゆ」のように、「ニ」である。

なお、「面影に見ゆ」のみならず、「思ほゆ」の場合にも、「面影のみに 思ほえば」

○かくばかり 面影のみに 思ほえば (面影耳 所念者) いかにかもせむ 人目繁くて 〔萬葉四・752〕

と「ニ」が用いられている。

以上の「夢に見ゆ」「面影に見ゆ」「思ほゆ」「見えぬ」の特徴をまとめると、

1、「夢二見ユ」において、夢を見る主体を示す表現は、

「吾に」のように「ニ」である。

「夢に見る」対象は「ヲ」で示す。

「夢に見ゆ」の対象は「シ」「ガ」「ノ」で示す。

「面影に見ゆ」の対象は不表示と「シ」で示すものがある。

「見ゆ」の否定形「見えぬ」の対象は「ガ」で示す。

2、「思ほゆ」において、思う主体を示す表現は、「吾に」のように「ニ」である。現代語では、「私には思われる」となるところである。

「思ほゆ」の対象は不表示のものと、「ハ」「シ」「ガ」「ノ」で示すものがある。これは、現代語の「故郷が思われる」「母が思われる」などに当たる。

以上、△二・二△では同格のガ、△二・三△では願望の対象のガ、△二・四△では「見ゆ」「思ほゆ」の対象のガについて述べた。同時に、「見ゆ」の対象を指す語は「ノ」「シ」の場合もあること、誰の目に見えるのかや誰に思われるのかは「ニ」であらわすことを述べた。

「妹が恋しい」「絵が見たい」「故郷が思われる」など、現代語でも用いられる「ガ」が、萬葉集の時代から使われていることがわかった。その「ガ」は、連体格や主格のガの使われ方をふまえて、時に「ノ」「シ」などと交替しながら使われている。

二・五 特指のガ

萬葉集に

○吾が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 吾が立ち濡れし (吾立所露之) [萬葉二・105 大伯皇女]

がある。「暁露に吾が立ち濡れし」は、連体形止めで詠嘆をあらわすと考えるのが一般である。

同様の例は、二・109、二・206、四・621、

四・662、十・2039、十・2311、十一・2425、十一・2832、十二・2964、十二・3000一云、十六・3804などに見られる。^④

卷十・2039

○恋しけく 日長きものを 逢ふべかる 夕だに君が 来まさ
ざるらむ (夕谷君之 不來益有良牟)

[萬葉十・2039 秋の雑歌 七夕]

について、全集注に、

◇タダニの下にナニシカモ (何故に) のような疑問副詞が省略されている。

と言い、「なぜいらつしやらないのだろう」と訳す (新大系でも、同様、「あなたは どうしていらつしやらないのだろう」と訳す)。古今和歌集であればそのような解釈も可能ではあるが、こゝは、連体形止めで「いらつしやらないことよ」と訳せば、嘆きがより深くなる。卷十一・2559

○昨日見て 今日こそ隔て 吾妹子が ここだく継ぎて 見ま
く欲しきも (吾妹子之 幾許継手 見巻欲毛)

[萬葉十一・2559 正述心緒]

の全集注

◇第三句の上にナニシカモのような疑問副詞があるとわかりやすい。

も同じで（全集訳「なぜあの娘に こうも続けて 逢いたいのだろう」、新大系訳「どうして我妹子にこうも続けて逢いたいのか」）、
「昨日逢って今日は逢わないでいるけれど、あの人にこんなにも続けて逢いたいことだよ」と詠嘆に訳すのがよい。

（二・二）に

○かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて 吾が

思へりける（吾念有来） 『萬葉十六・3804 有由縁』

をあげ、新大系に、

◇結句、係り結びではないが、主格助詞「が」があるので連体形で止める。

と注することを述べた。「係り結びではないが」と断っているのであるが、係り結びをゾ・ナム・ヤ・カを連体形で結び、コソを已然形で結ぶものに限定したのは、明治以後の学校文法である。主格助詞「ガ」を用いた場合に、連体形で止めるのは、広い意味での係り結びである。「吾が立ち濡れし」―「立っている私はすっかり濡れてしまった」、「ガ」は、ひそかに別れを告げに来た弟を思い、いつまでもその場に立ち尽くす姉の慟哭を一言で表現する強いことばである。右にあげた十一首も同じである。すなわち、「ガ」は係助詞として、その句を強く指示する働きも持つのである。これを〈特指〉と名付ける。

以上、（二）では上代のガに、同格のガ・対象を指し示すが・特指のガが認められることを述べた。対象を指し示すがには、「見が欲し」「妹が見まく欲し」など願望の対象を指し示すもの、「君が見ゆ」「妹が思ほゆ」など自発の対象を指し示すもの、「見えぬ」など不可能の対象を指し示すものが認められた。それらは連体格・主格のガ・ノの使い分けに応じて使い分けられ、特別にその物・人を指すのではない場合には、シが用いられている。

1、「見が欲し」の対象をシで指し示すものがある

「見まく欲りす」の対象を「ヲ」で指し示すものがある

「見まく欲し」の対象を「ガ」で指し示しているものがある

ガで指し示すものは、のちの時代の「絵が見たい」などの表現に繋がる

2、「夢二見ユ」において、夢を見る主体を示す表現は、「吾に」の

ように「二」である

「夢に見る」対象は「ヲ」で示す

「夢に見ゆ」の対象は「シ」「ガ」「ノ」で示す

「面影に見ゆ」の対象は不表示と「シ」で示すものがある。

「見ゆ」の否定形「見えぬ」の対象は「ガ」で示す

3、「思ほゆ」において、思う主体を示す表現は、「吾に」のように「二」である

現代語では「私には思われる」となるところである。

「思ほゆ」の対象は不表示のものと「ハ」「シ」「ガ」「ノ」で示すものがある

これは、現代語の「故郷が思われる」「母が思われる」などに当たる。

シは、次に述べる中世の用例にはまったくあらわれない。平安期に助詞・助動詞が発達すると、シは強調の助詞として用いられるようになり、上代にみられる格助詞的な用いられ方は衰退する。ノも連体格の用法が広く行われるようになる。そこで、対象を指し示す助詞は、ガの専一となる。

三 平安期から江戸期のカ

平安期になると、ガは連体格のものは減少し、ノとともに句の中の主格をあらわすものや、接続助詞として用いられるものが多くなる。ノは句の中の主格をあらわすもの、連体格をあらわすものが多くなる。また、シは強めの副助詞となっていく。中世になると、ガ・ノは言い切りの文の中の主格をあらわすことも増えていく。

中世の口語がよくあらわれている『ESOPONO F
ABVLAS』(『エソポのハブラス 天草版イソホ物語』)
の中では、

○…hotte miruni morijino gotoku, quabunno vōgongra

miyeta. [四一九頁]

(…掘ってみるに文字の)とく、過分の黄金が見えた。)

○…dajjino degeōto vomōta catana dajji nōte, vomoino-
focano catayori dajjiga vocottato yūte xinda. [四九四頁]

(「…大事の出来うと思うた方は大事なうて、思いのほかより大事が起こった」とゆうて死んだ。)

○geccu fitoyori faqini nanni vōcotoga vonoi. [四九八頁]

(結句人より先に難に遭うことが多い。)

○…yaranolureba cuchizulanini vōcaneno quru zoto
fagebu fodonu, … [四八九頁]

(ややもすれば、口ずさみに「狼の来るぞ」と叫ぶほどに、
…)

「黄金が見えた」「大事が起こった」「難に遭うことが多い」「狼の来るぞ」など多数ある。

江戸期のものである。

○とかく吉原は黒仕立がよい。 [遊子方言 三九頁]

○此中の新酒は、あんまり水の交よぶがすくない。

[東海道中膝栗毛 六八頁]

○モシおゆがわきました。

[東海道中膝栗毛 七二頁]

○これに段々、こうしやくの、ある事[こつ]た。

[遊子方言 三九頁]

「黒仕立がよい」「水の交よぶがすくない」「おゆがわきま

した」「こうしやくのある事た」など、現代と変わらぬ使
い方である。

また、『エソポのハブラス』では、「ある」「ない」の主
格が「ガ」であらわされている。

○ EVROPA no vchi Phrigiatoyū cunino Troia toyū jōrimo
qipenni Amoniatō yū fatoga vogiaru. [四〇九頁]

(エウロパのうちヒリシアとゆう国のトロヤとゆう城裡の近
辺にアモニヤとゆう里がおぢやる。)

○ Iudeni yomeiriga commiōnichino vchimi aru:

[四二四頁]

(すでに嫁入りが今明日のうちにある。)

○ Torito, qedamonono nacaga fuuami natte, qiūxenni
voyobu cotoga atta. [四六〇頁]

(鳥と獸の仲が不和になって、弓箭に及ぶことがあった。)

○ miūqūmonono falagueō cotoua lono iarega nattoyūte,
... [四二八頁]

(買物を捧げうことはその謂れがない)とゆうて、...)

○ Areni niqueō dōriga naito cocoroni vomōga...

[四九三頁]

(「...あれに逃げう道理がないと心に思うが、...」)

「アモニアとゆう里がおぢやる」「嫁入りが今明日のうち

にある」「弓箭に及ぶことがあった」「その謂れがない」
「道理がない」などである。江戸期の

○こゝにひとつはかりことがある。

[東海道中膝栗毛 六〇頁]

○村はづれに、茶やが式軒あるところがあ

[東海道中膝栗毛 六五頁]

「はかりごとがある」「茶やが式軒あるところがある」も
同じである。「がある」「がない」は現代語でも用いるもの
であるが、平安期には、

○むかし、お[を]とこありけり。

[伊勢物語九]

○お[を]とこ、血の涙をながせども、とゞむるよしなし。

[伊勢物語四十]

のように主格の助詞をあらわすことはなかった。

○むかし、ある所に、おじいさんとおばあさんがあったとき。

おじいさんは山に柴刈に、おばあさんは川に洗濯に行ったと
な。

の「ガ」と「ハ」の違いを云々することはなかったのである。
「ハ」は「おじいさんとおばあさんのうち、おじいさ
んのほうは」「おばあさんのほうは」と、「他と区別」して
取り出しているにすぎない。『エソポのハブラス』の時代
であれば、「ガ」は「ある」と結びついて存在をあらわす
ことばである。

所有の「ない」の場合も、

○ nangini togaga nai. [四三〇頁]

(汝に咎がない。)

○ varenia xujinga nai, jiyūno mi giato yūte ... [四一四頁]

(「われには主人がない。自由の身ぢや」とゆうて…)

「汝に咎がない」「われには主人がない」のように、「ガ」を用いている。その所有者は「汝に」「われには」のように「ニ」「ニハ」であらわす。江戸期のものにも、

○ 銭がないといへば、おれが丸角あつらへておゐた、花かん袋がある。 [遊子方言 三九頁]

などが見られる。

また、

○ Mino tame bacariuo vomōte, taninni atauo nalu monoua,

Jono mucuiuo nogaruru cotoga canaunau. [四九八頁]

(身のためばかりを思うて、他人に仇を為す者は、その報いを逃るるゝことが、かなわぬ。)

○ vare meuo fitotŕu mochitarepa, hexxite yōjinga yŕta coto giato... [四九四頁]

(「われ眼をひとつ持ちたれば、別して用心が要ったことぢや」と…)

○ 手がなくちやアおまんまがくはれねへ

[東海道中膝栗毛 五九頁]

「逃るることがかなわぬ」「用心が要ったことぢや」「おまんまがくはれねへ」のように、可能・必要をあらわす例もあり、

○ cocorono vchinia ychidanto fucai gotaixerno fodouo yorocobu teiga niyete gozattato mōxita. [四二一頁]

(「…心のうちには一段と深い御大切のほどを喜ぶ体が見えておつた、と申した。)

○ corega fuxinni vomouaruruto yū. [四九三頁]

(「…これが不審に思わるる」とゆう。)

「喜ぶ体が見えておつた」「これが不審に思わるる」のように、自発の対象を「ガ」であらわす例もある。〈二〉にも述べたごとく、これらは萬葉の時代から見られるものである。

これら自発・可能・必要の対象を指し示すがが、形容詞の対象と並べることができるのは、

形容詞 花が美しい

私は花を美しいと思う…私は思う
花が美しい …花の属性

自発

山が見える

山を見る

∴私には見える

山が見える

∴山の状態

不可能

山が見えない

山を見る

∴私には見えない

山が見えない

∴山の状態

必要

お金が要る

お金を必要とする

∴私には必要である

お金が要る

∴懐の具合

のように、これらが、主観的な私の動作と、客観的なものごとの様相・状態を、同時にあらわすものであるからである。

四 現代のガ

対象語と言われている

a 水が飲みたい。

は、

b 水を飲みたい。

と交代可能な場合もあるが、「ほかでもない。コーヒーではなく水が飲みたいのだ」という場合は、「ガ」は「水」を特別に指している。「水を」は「飲む」の目的語であるから「水を飲む」が結びつく。「水が」は「飲む」と結びつかないため「タイ」と結びついて「飲みたい」がひとまとまりになり、「水が」は「飲みたいもの」を指し示す。この「ガ」は係助詞である。

c 「あれ、太郎に渡してくれた？」

「何を？」

の「何を」は「渡す」の目的語である。が、

d 「あれ、太郎に渡してくれた？」

「何が？」

のような会話も成り立つ。「何が？」は「何のことを言っているのか？」の意味である。「ガ」はその「何」を特に指す言葉である。

現代語で、

e 私は山田です。

と

f 私が山田です。

とを較べた場合、eがその場に居る人々の中で「私」を取り出して、自己紹介しているのに対し、fはたとえ相手

が「山田さん」を探しているときに、「私」を特に指すものである。「ハ」は対比的に提示したり、強めたりする働きをもつものであるが、「ガ」は特に指すことがその役割である。「ハ」には

g 私、うれしいわ。

のような終助詞になるものもあるが、「ガ」にも

h それは間違いだが。それは間違いじゃが。

のような終助詞になるものもある。fやhの場合の「ガ」は係助詞（U終助詞）といつてよい。

近年、「ハ」と「ガ」の違いを論ずる説が種々あるが、ガとノとの間で、連体格の場合と主格の場合の機能の違いを論じ、ガとハとの間で、係助詞としての役割の違いを論じれば、すっきりするのではないか。係助詞として、

ハ：対比的に提示

ガ：特指

と考える。

注

(1) 憑有来 舊訓「タノミタリケル」とよめるを童蒙抄に「タノミタリケリ」とよめり。按ずるに「ケル」ととぢむる時は普通は上に「ゾ」「ナモ」「ヤ」「カ」の係助詞あるべし。これらなくして「ケル」ととぢむることは萬葉時代には極めて異例なり。然れども、卷二十「四四九六」に「宇良賣之久

伎美波母安流加夜度乃鳥梅能知利須具流麻泥美之米受安利家流ウラメシクキミハモアルカヤドノウメノチリスグルマデミシメズアリケル」の如きもの全くなきにもあらず。今、この處は感慨を寓する所なれば「ケル」とよみたる方よかるべし。この故に舊訓に隨ふ。(山田孝雄『復刻限定版 萬葉集講義 卷第三』宝文館出版 一九七〇年 復刻版発行 三・470)

(2) これは「大船を 漕ぎわが行けば(許芸和我由氣婆)」(十五・3627)などと同じ、北方言語・アルタイ諸言語に見られる人称接辞と類似的の語法である。(拙著『日本語のなりたち』二〇〇三年 ミネルヴァ書房 二六三頁)

(3) 其レニ、孫ニ候フ男ノ、今年蔵司ノ小使ニテ罷リ渡リ候ツル也。其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ、罷出テ見給ヘムト思給ヘシニ、。(岩波新日本古典文学大系『今昔物語五』一九九六年 卷第三十一 賀茂祭日一条大路立札見物翁語 第六 四五頁 底本は蓬左文庫蔵本)

(4)

○ 吾が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 吾が
立ち濡れし (吾立所霑之)

○ 大船の 津守が占に 告らむとは まさしく知りて 我
が二人寝し (我二人宿之)

○ 楽浪の 志賀さざれば しくしくに 常にと君が 思ほ
せりける (常丹跡君之 所念有計類)

○ 間なく 恋ふれにかあらむ 草まくら 旅なる君が 夢

にし見ゆる(客有公之 夢尔之所見)

〔萬葉四・621 佐伯宿祢東人の妻〕

○網児の山 五百重隠せる 佐堤の崎 小網延へし子が
夢にし見ゆる(左手蠅師子之 夢二四所見)

〔萬葉四・662 市原王〕

○恋しけく 日長きものを 逢ふべかる 夕だに君が 来
まさざるらむ(夕谷君之 不來益有良牟)

〔萬葉十・2039 秋の雜歌〕

○はだすすき 穂には咲き出ぬ 恋を吾がする(恋乎吾
為) 玉かぎる ただ一目のみ 見し人ゆゑに

〔萬葉十・2311 秋の相聞〕

○山科の 木幡の山を 馬はあれど 徒歩より吾が来し
(歩吾来) 汝を思ひかねて

〔萬葉十一・2425 寄物陳思〕

○山川に 笠を伏せて 守りもあへず 年の八歳を 吾が
ぬすまひし(吾窃儻師) 〔萬葉十一・2832 譬喩〕

○かくのみに ありける君を 衣ならば 下にも着むと
吾が思へりける(吾念有家留)

〔萬葉十二・2964 寄物陳思〕

○魂合はば 相寝るものを 小山田の 鹿猪田守ること
母し守らすも 一云「母が守らしし(母之守之師)」

〔萬葉十二・3000 寄物陳思〕

○かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて
吾が思へりける(吾念有来) 〔萬葉十六・3804〕。